

宮中会長の新しい「お手玉歌」 『いい子でねんねと』が誕生

宮中雲子会長が、このほど、新しい「お手玉歌」『いい子でねんねと』を作詩され、昨年末には曲がついて発表されました。また、この詩についてのエッセイを、社団法人日本歌曲振興会の会報に掲載されていますので紹介します。

新しいお手玉の歌『いい子でねんね』の歌詩は、つぎのとおりです。

『いい子でねんねと』

手の甲に お手玉のせて

親亀の背中にとった

子亀を想う

手の甲のお手玉を

はずませれば

喜んで とびはねる子亀

母の背中で

あやされて育った幼いころ

私も こんなだったのだろうか

手の甲にのせた お手玉を

やさしくはずませ トントントン

いい子でねんねと トントントン



『いい子でねんねと』の誕生について、宮中会長は、平成25年2月発行の社団法人日本歌曲振興会の「会報」に、次のようなエッセイを寄稿しています。

『お手玉と私と歌と』

宮中雲子

幼い頃、お手玉遊びに夢中になったものですが、今またお手玉遊びに興じています。

20年前、愛媛県の新居浜で「日本のお手玉の会」が設立され、全国に発信しようということになった時、同じ愛媛県人として参加のお誘いがあったからです。

いま、子供達には昔遊びとして、老人施設ではリハビリも兼ねて、お手玉遊びが見直されてきています。脳の活性化に役立つものとして科学的に証明されてきていて、それを広める活動をしているので、いつもすぐそばにお手玉のある暮らしをしている私ですが、ある日、手の甲にお手玉をのせていたら、なんと、親亀が子亀を載せている姿にそっくりに見えました。

それはまた、私が母の背中に負われている姿へとつながっていったのです。

私はいつしか、赤ちゃんをあやす母の姿を想って、トントントンと手の甲でお手玉を弾かせていました。

それがそのまま詩になり、作曲されて歌われたのは、本当にうれしいことでした。

(社団法人日本歌曲振興会「会報」No.83から)